

さてそこで作品を作る第一の条件は何かということですが、まずあんな作品を書いてみよう、こういう作品を書いてみたいという興味か沸いてこなければいけない。そしてそれをどういう風に表現するかと、あれこれ煮つめてゆく、すなわち構想に対して心が燃焼してくれば、作品はそこで半分出来上がったようなものです。むかし、

木彫りの職人などが、ぶらぶら遊んでばかりいて、酒を飲んでごろごろしていて、方々からの矢の催促に対して一向に彫ろうとしなかったという話がよくありますが、わかりますね。名人ならそうなるわけです。何でも持つてくればすぐ書いてやるといった代書屋みたいなのは職人芸になってしまふ。うまく書こうというのでも何でもない、型にはまっていればいだけですから。こうやって、ああやって、ちよっとおもしろいことをやりたいと思つたら、そう簡単にゆきません。こんなことをいうと、みんなごろごろし始めて、作品なんてすぐ書けるものじゃない、なんていって、何も考えないであらかた寝ていたなんていうことになっては困りますが。むかしの職人はそうやって煮えたぎるチャンス wait していたらしい。しかしそのチャンスは燃料をくべずにおいては、煮えたぎりもしないし生まれてもこない。

おがましいですが、私の例で申しますと、何はともあれ、書こうと思つたものを一枚書くのです。そして自分の部屋に貼つておいて寝ても覚めても、暇さえあれば見ている。そしていい考えが浮かぶと夜中でも起きて書いてまた貼つて置く。そうするとまた構想が浮ぶ。つまり私の場合は少しづつ積み重ねてゆくわけです。もし作品を書かずに考えていけば、他の用事にまぎれて、それまでの意図がすべて消えてしまふ。ですから書いては貼つて暇さえあればにらめっこしている。ひとつの叩き台をこしらえて、その叩き台を叩いて叩いて叩き抜いてゆく間に燃え上がってくるものがある。実はこない時もあるが、むかしの職人のように、ごろごろして燃え上がるものを待っているわけにいかないので。七月の何日には搬入しなければならぬ展覧会があるといった具合ですから、気が向かない

からとぼやぼやしていたのではどうにもならない。あらかた一年中気が向かないでおしまひになつてしまふ。ですから叩き台をこしらえて無理に燃え上がらせる。そしてこう書こうと、大体決まる時がある。その時一気に書く。

しかし作品を練るといっても、頭の中にいろいろな材料が入つていなければどうにもならない。当たり前のことですが、それには機会を見ては内容の濃い作品や展覧会を見て歩くことです。東京などでは三百六十五日展覧会のない日はないわけですから、まめに歩けば随分いいものが見られます。何となく全部見るといふのではなく、大きな展覧会でも、二点か三点、よいものが見つかればいいわけです。

その次には材料です。いろいろなもの選択も決まる。配合も決まつたとなれば、それをどういう材料で表現するかという材料の研究がなければいけない。たとえばぼろぼろの紙には、いかにもものあわれを催すような歌をとぼした薄墨で書いてゆく、といったように材料を自分の作品の計画の中にハーモニーさせてゆく。このごろは随分いろいろな質の紙が出ておりますから、そういうものを縦横に使つてみて工夫をこらしたらよい。たとえば中国の煮礮朥などは墨の滲み方に特色があります。静かで気負わない作品などを書く時などにはその滲み具合は大変いい。私はある時ハトロン紙を裏返しにして書いたことがある。しめりが足りないので一晩新聞紙に刷毛で水をつけて挟み軽く巻いておいたら、すつかりしめりがついて何ともいえないおもしろい味が出た。まあこんなこともひとつの工夫ですが。紙の色などいろいろ作品に合わせて工夫して使つてみるといい。正倉院の御物の光明皇后のお書きになつた「杜家立成雑書要略」などは、色の違った紙をつぎ合わせて、そこに漢字が書いてある。いま想像すると、どの色のところどの文例があつたという心覚えかもしれない。(つづく)